



大門小だより

7月号

大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子

令和元年6月27日

横浜市立大門小学校

「ふみの日」に思いを寄せて

校長 佐藤 峰子

日本にはたくさんの記念日があります。国民の祝日となっている記念日から、様々な団体が提唱する記念日まで、1年365日何かしら記念日になっていると言っても過言ではないように思います。

7月23日の「ふみの日」は、1979年に日本の郵政省が制定した記念日で、「手紙の楽しさ、手紙を受け取るうれしさを通じて文字文化を継承する」ということが主旨と聴いています。なぜ7月23日にしたのか疑問に思うところですが、7月は旧暦で「文月」という別称で呼ばれていたことや、23日を「ふみ」と呼ぶ語呂合わせに因んだようです。

「手紙を受け取るうれしさ」を題材とした絵本の中に、アメリカの作家アーノルド・ローベル作の「おてがみ」があります。がまくんとかえるくんが主人公のお話は、シリーズとなっており、世界中の子どもたちに愛され、長く親しまれています。「おてがみ」は、シリーズの一冊である「ふたりはともだち」（訳三木 卓 文化出版局）に収められており、光村図書国語2年下の教科書（題名「お手紙」）にも採用されています。お手紙を一度ももらったことがないと悲しむがまくん。親友のかえるくんは、がまくんに手紙を書こうと思い立ち、書いた手紙をかたつむりくんに託します。その手紙をがまくんと一緒に待つかえるくん。かたつむりくんはなかなか現れません。その間のふたりの自然でユーモラスなやりとりや、お互いへのちょっとした気遣いが絶妙で、若いときよりも年を重ねた今の方が味わい深く読める、大人になって読み返したい絵本の一つだと私は思っています。

「お手紙」は、「音読劇をしよう」という学習のゴールが設定されています。私が担任だったときは、物語を読む楽しさが学習のねらいで、発展として誰かに手紙を書いてみようとしたように思います。長い教員生活で、2年担任は3回だけなので、かなり曖昧ですが、子どもたちは友達や離れて暮らす祖父母、転校した友達に実際に手紙を出していたように記憶しています。

携帯電話やスマートフォン、iPatなどの普及で、連絡方法がメールやラインで行われることが多くなり、手紙を書く機会が減っています。職場の机の中に、季節にあった一筆箋や封筒・便箋を常に用意していますが、以前に比べると減り方が少なくなってきました。そもそも「書く」という行為自体が減ってきており、文字を「打つ」という行為は確実に増えています。「ふみの日」を制定した主旨に「文字文化の継承」がありましたが、時代とともに「文字文化の継承」の方法が変わりつつあるということでしょうか。

新学習指導要領では、国語に「実用的な文章を書く活動」が位置付けられています。1・2年で暑中見舞い・年賀状・招待状を書くこと、3・4年生では依頼文・案内文を書くこと、5・6年では案内状や礼状を書くことを例に上げています。ですが扱い時間が短く、学習したことを日常でどう生かしていくかが課題だろうと思います。この機会に、私もお無沙汰している人に手紙を書こうかなと思っています。